

幼児の思いやり行動と攻撃行動 —IWM (Internal Working Model) との関係—

武田京子* 菅原正和* 吉田澄江** 笹原裕子** 加藤和子**

(2004年2月5日受理)

Kyoko TAKEDA, Masakazu SUGAWARA,

Sumie YOSHIDA, Yuko SASAHARA, Kazuko KATO

Prosocial and Aggressive Behavior in Young Children

I 問 題

本研究は、平成14年度から学部・附属校園・保護者が協力して、J.Bowlby (1980, 1988), M.D.S.Ainsworth (1991), I.Bretherton (1990) 等の Internal Working Model (IWM; 内的作業モデル) 理論を背景に、幼児の行動の発達変化とその認知齟齬を「思いやり行動」と「攻撃行動」から分析したものである。

平成14年度、幼児分科会では附属幼稚園児の攻撃的行動に着目し、保護者と保育者間の受け止め方の違いについて調査し考察を行なった。今回は、後日行なった、県南H町の幼稚園と盛岡・北上・水沢・花巻市の6保育所の調査結果を付け加えて、内的作業モデルとの関連について考察した。

II IWM (Internal Working Model) について

IWM (内的作業モデル) とは、Bowlby がアタッチメント理論の中で、愛着に関する表象モデルとして提唱しているものである。他者と自己との関係について、一人一人が持っているスキーマのことである。子どもは、このモデルを使って出来事の評価や情報の解釈を行ったり、未来の展望や安全感を得るのに有効な個人の行動プランを作成すると考えられている。

内的作業モデルは、子どもの発達過程の中で出会う様々な愛着対象との出来事や経験を通して、形作られるものである。子どもの養育を行なう者(多くの場合は母親)がいつも子どもを受け入れ、きちんと対応しているときには、子どもは愛着対象について「自分のことを受け入れてくれ、適切な支援をしてくれるもの」、いわば安全基地として心の中に位置付け、自分のことを相手にとって「受容される価値のあるもの」と位置付ける。このような内的作業モデルを形成した子どもは、困難な状況に出会ったときに、他者からの援助を積極的に活用しながら困難に立ち向かう対処方法を選択するようになる。しかし、養育者から拒絶されたり無視された場合には「自分を拒否するもの」ととらえ「自分は受容や援助の対象として価値の無いもの」と位置付ける。このような子どもは、他者とは距離を置いた行動パターンを選択するようになる。

内的作業モデルのタイプは、親との分離・再会場面を含んだ、乳幼児の行動観察にもとづいて評定を行ない、

* 岩手大学教育学部

** 岩手大学教育学部附属幼稚園

安定型・回避型・両極型に分類される。

安定型 (secure type: 親との分離時に多少の混乱を示す。再会時に積極的に接近・接触をもとめ受け入れられたことがわかると安定する。親がそばにいると安心して行動できる。)

回避型 (avoidant type: 分離時に悲しみ・苦悩・抵抗を示さない。再会時に無視・回避の行動が見られる)

両極型 (ambivalent type: 分離時に激しく泣き、再会時に親に接近するが抱き上げられると嫌がったりぐずったりする。親がいても落ち着かず相対的に探索行動が少ない)

Ⅲ 方 法

1. 調査対象

	男児	女児	合計
附属幼稚園	85	77	162
H町幼稚園	35	48	83
保育所 (盛岡・北上・水沢・花巻)	151	149	300
合計	271	274	545

Table 1: 調査対象の概要

2. 調査内容

Bowlby の理論に基づき、我々が独自に作成した質問紙 (表 2・3・4) により、幼稚園・保育所 3・4・5 歳児の担任と保護者に「思いやり行動尺度」「攻撃行動尺度」「内的作業モデル (IWM)」の調査を行なった。

(1) 幼児の思いやり行動

cf. 向社会的行動 (Prosocial Behavior) 愛他行動 (Altruistic Behavior)

(2) 幼児の攻撃行動

cf.*BAQ(Buss-Perry Aggression Questionnaire)

(Capi, A., et al., 1995; Eisenberg, N., et al., 2000)

(3) 幼児の IWM (Internal Working Model)

cf.[Cassidy, J. & Shover, P.R., 1999; Thompson, R.A., 1999;

Kochanska, G., 2001; Braungart-Ricker, J.M., et al., 2001.]

(1)、(2)、(3)の研究を基に新たに幼児用の「思いやり行動尺度」「攻撃行動尺度」「IWM」の質問紙を作成し、幼稚園・保育所 3、4、5 歳児の担任と保護者を対象に 5 段階評価による調査を行った。

Table 2 : 思いやり行動尺度.

- 1) ないている子をなぐさめる
- 2) わからなくて困っている子がいたら教えてあげる
- 3) 仲間に入れない子がいたらさそってあげる
- 4) 物をなくして困っている子がいたら一緒に捜す
- 5) お友達に親切でやさしい
- 6) けんかをしている仲間を見たら止めさせようとする
- 7) 順番を自分からゆずってあげる
- 8) 絵本やテレビを見ていてかわいそうになりもらい泣きする
- 9) お友達のために先生に援助を求める
- 10) 助け合ったり、協力し合うことができる
- 11) 弱い子や小さい子のお世話をする
- 12) お友達のために心配してあげる

Table 3 : 攻撃行動尺度

- 1) おともだちをたたく
- 2) おともだちを泣かせる
- 3) 噛みついたりする
- 4) 物を投げつける
- 5) ドアや物を蹴る
- 6) ひっかいたり、つねったりする
- 7) 動物や虫をいじめる
- 8) あばれたり、わめいたりする
- 9) 他の子のものをとりあげる
- 10) 独占したがる
- 11) 腹をたてて、ひどいことを言う
- 12) 教師につっかかる

Table 4 : 内的作業モデル (IWM)

- 1) 必要に応じて教師を頼りにしながら、安定して自分の活動を展開する
- 2) 自分が必要なときには教師に対してためらいなく率直に援助を求める
- 3) ちょっとした教師とのかかわりに安心感を得て、また学習や遊びにもどる
- 4) 教師との親密な関係を持つが、友達との遊びや回りの探索をする活動が多い
- 5) 遊びや活動の中で達成感や自信を持つ
- 6) 家の人が迎えに来たときは喜びを素直に表して甘える行動が見られる
- 7) しばしば教師に対して、注意を引こうとしたり接触を求めたりする
- 8) わざと困らせるなど、あまり効果的でないやり方で教師の注意を引こうとする
- 9) 友達と関わることより、教師の周りにいることを好む
- 10) 自分の要求や意志を素直に教師に伝える
- 11) してほしいことを言うより、教師の近くで助けてくれることを待っている場合が多い
- 12) 迎えにきた母(父)親に接触を求めに行くが、たたいたり、キックすることがある
- 13) 突っついたり、逃げたりするなど、直接的ではないやり方で教師との接触を求める
- 14) 教師の助けが必要な時も、屈折した形で助けを求めることがある
- 15) 教師との接触を求めるがひとたび教師が接近すると逆に拒否的な態度を示したりする
- 16) 情緒的に傷つきやすく、感情が高まると部屋の隅などに行って人との接触を拒絶したりする
- 17) 友達との関わりを持ちつつ一緒に遊ぶことが苦手である
- 18) 不適切な方法で過度に友人の興味を引こうとする

IV 結果及び考察

各質問項目を5段階に評定し、因子分析（バリマックス回転及びプロマックス法）を行なった。

1. 思いやり尺度

保育者は3、5歳を高く評価し、保護者は発達段階につれて高く評価した（Fig. 1）。

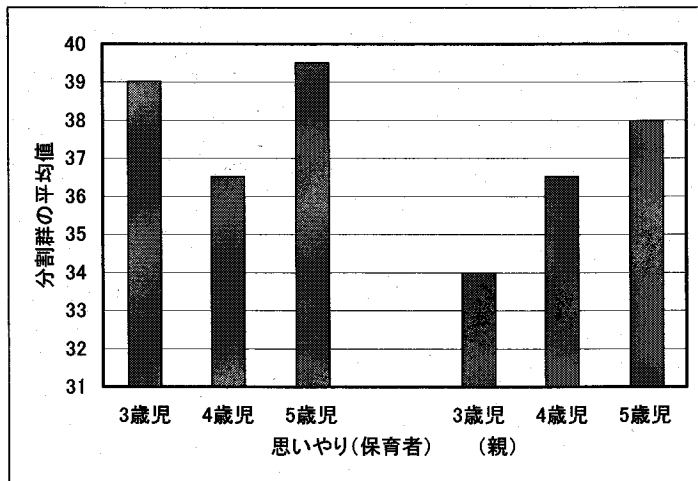


Fig.1 思いやり行動

2. 攻撃行動

保育者、保護者ともに発達段階につれて得点は低くなった（Fig. 2）。

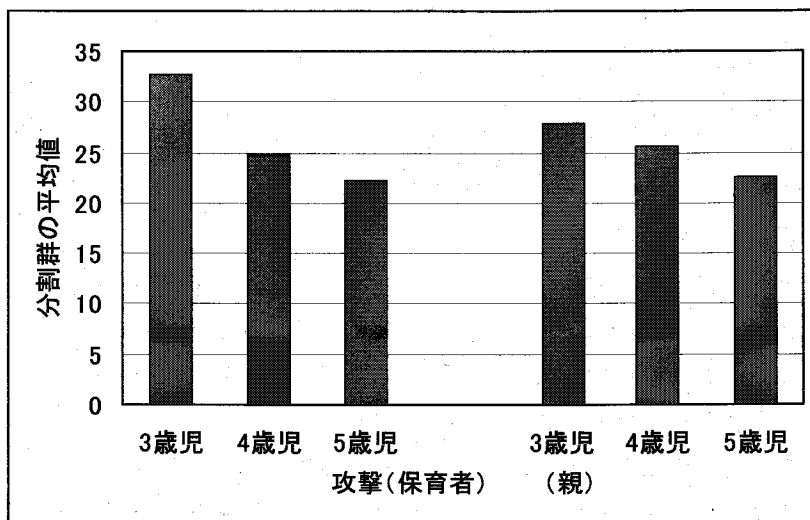


Fig.2 攻撃行動

3. IWM (内的作業モデル)

IWMは、「安定型」「回避・依存型」「アンビヴァレント型」の3つに分類した。「回避・依存型」は、保護者への回避に加えて保育者への依存が加わる様子が見られたので新たにこの名称をつけた。

年齢別IWMでは、アンビヴァレント型が3歳児に多く見られ、3歳児の「攻撃行動」得点が高く出ることと関連していると思われる。男女間のIWMでは、男児のアンビヴァレント型が高く出現している($p < .003$)。IWM

と「思いやり行動」「攻撃行動」の相関係数から、アンビヴァレント型の幼児は教師の「攻撃行動」得点が明らかに高くなっている (Table 5)。

	アンビヴァレント型	安定型	回避・依存型	思いやり (保育者)	思いやり (親)	攻撃 (保育者)	攻撃 (親)
アンビヴァレント型	1	0.08	-0.068	-0.225	-0.176	0.711	0.377
安定型	0.08	1	0.359	0.193	0.233	0.328	0.093
回避・依存型	-0.068	0.359	1	0.236	0.11	0.06	-0.031
思いやり (保育者)	-0.225	0.193	0.236	1	0.236	-0.219	-0.19
思いやり (親)	-0.176	0.233	0.11	0.236	1	-0.167	-0.198
攻撃 (保育者)	0.711	0.328	0.06	-0.219	-0.167	1	0.408
攻撃 (親)	0.377	0.093	-0.031	-0.19	-0.198	0.408	1

162観測資料を計算に使用

10ケースは欠測値のため除外

Table 5 : 相関行列

保育者から見た場合、アンビヴァレント型、安定型、回避・依存型の順に、保護者から見た場合は安定型、アンビヴァレント型、回避・依存型の順になった。

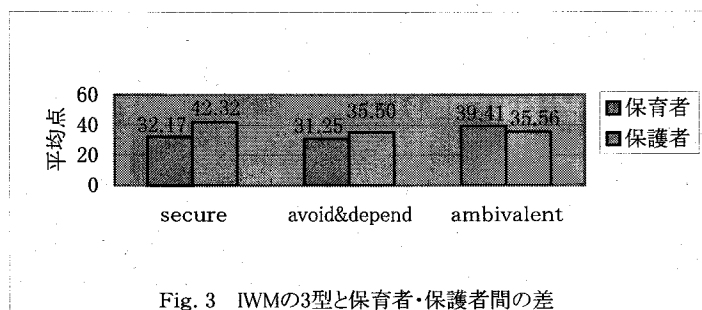
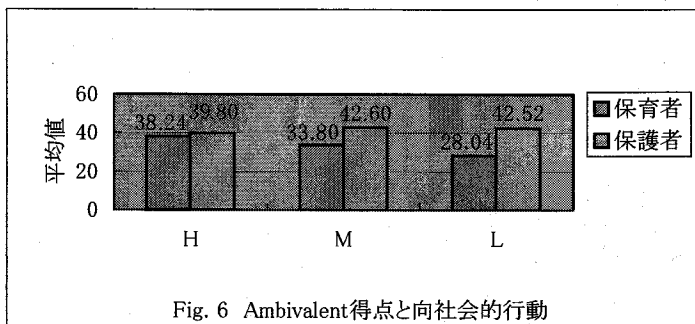
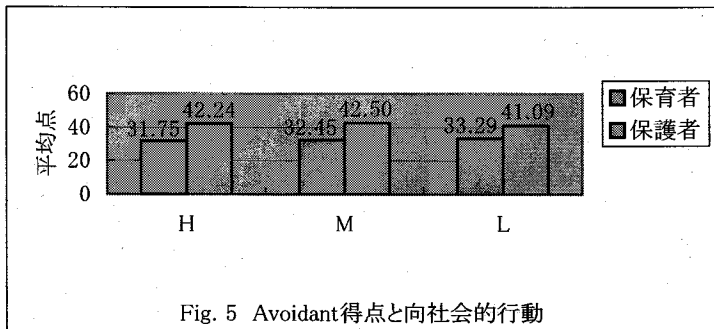
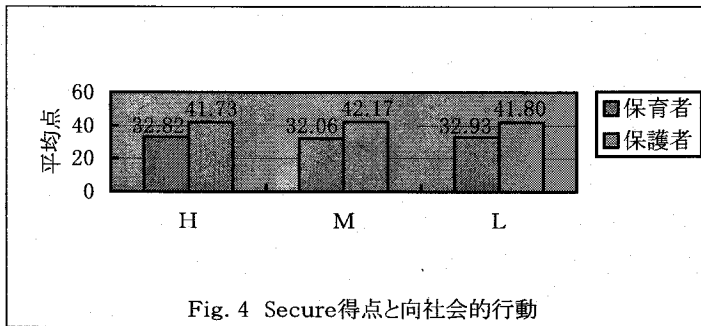


Fig. 3 IWMの3型と保育者・保護者間の差

安定型に保育者と保護者間に有意差が見られた ($P < .0001$)。保育者は子どもの行動をある程度の距離において批判的に捉える傾向があり、保護者は好意的にとらえる傾向がある。

① 内的作業モデルと向社会的行動における保育者・保護者間の認知齟齬

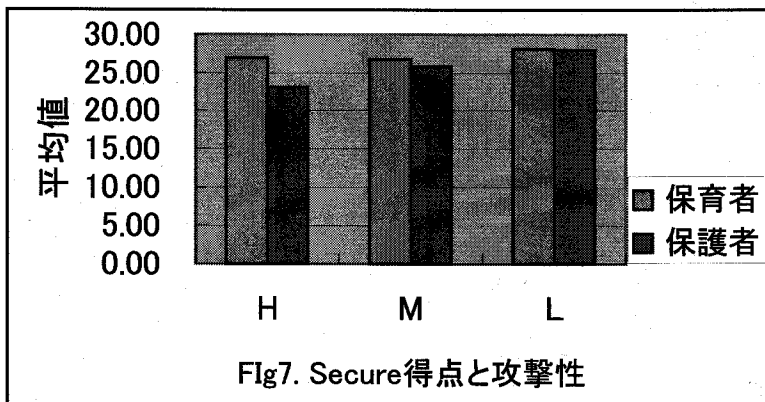
表3の質問項目1~7と10を secure 得点、8, 9, 11, 12を回避依存得点、13から18をアンビヴァレント得点とし、高中低の3群に分け、保育者と保護者の思いやり行動認知との関連を考察した。



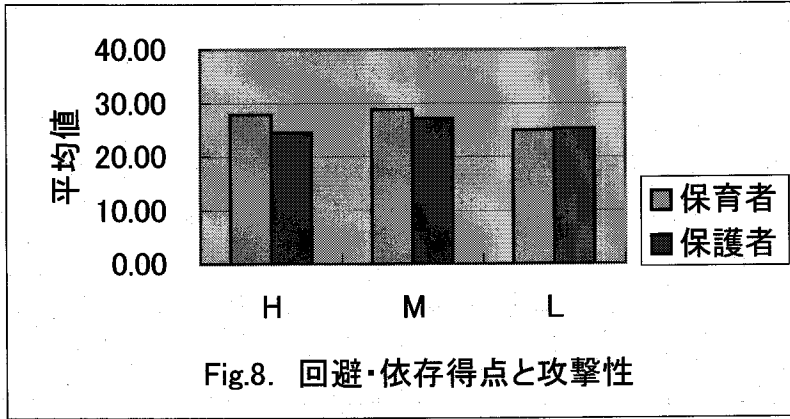
3群ともに保護者の方が思いやり行動を高く評価する傾向が見られた。アンビヴァレント型高得点群では保育者と保護者間では齟齬が見られなかった。

② 内的作業モデルと攻撃性行動に見られる保育者と保護者の認知齟齬

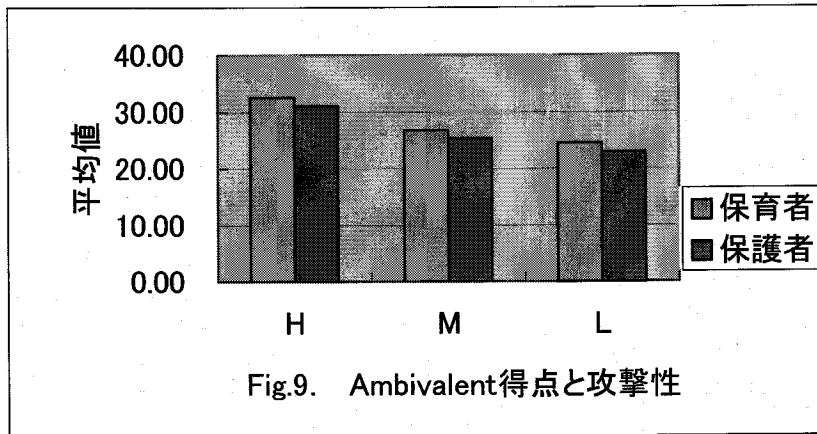
①と同様に3群に分け分析し考察した。



secure 得点が低くなるにつれて認知齟齬が少なくなっている。高得点群で保護者の攻撃性認知が有意に低い ($P < .0001$) のは、「親子関係が安定している」と感じている保護者は、子どもの攻撃的行動を客観的に認知できずに、「家の子に限ってそんな行動をするはずがない」と見てしまうことを意味している。逆に低い群では、保護者は子どもとの間に距離感をもっており、客観的に子どもの行動を認知している。



保育者の中得点群と低得点群の間に有意な差 ($P < .0001$) がみられた。



保育者と保護者間では有意な差は見られないが、各得点群間に有意な差 (ともに $P < .0001$) が見られ、特にアンビヴァレント得点が高い群においては、保育者・保護者とも攻撃的行動を認める傾向が強い。

V 結論

子どもの行動認知をする場合、保育者と保護者間では、保護者の方が子どもの行動を好意的に認知する傾向にある。安定型の保護者に特にその傾向が強い。

アンビヴァレント型の保育者と保護者間では、攻撃的行動などに対する齟齬は見られない。

発達過程において乳幼児期の親子関係に必要とされる「一体感」「信頼関係」の形成のためには、子どもの立場に立った行動認識が必要であると考えられる。子どもの自立を考えることも必要であるが、早過ぎる分離は子どもの心理面での不安定につながることを考慮しておかなければならない。

VI 今後の課題

調査資料の検討は、性別・発達段階別・保育環境（幼稚園・保育所）別などの視点からも可能である。さらに深めて行きたいと考えている。

References

- 1) Bowlby, J. : Attachment and Loss : Vol.3.Loss.Basic,New York,1980.
- 2) Bowlby,J. : A secure base : Parent-child attachment and healthy human development.Loss : Vol.3.Loss.Basic,New York,1980.
- 3) Bretherton,I. : Communication patterns,internal working models,and the intergenerational transmission of attachment relationships.Infant Mental Health Journal,1990,11,237-252.
- 4) Ainsworth,M.D.S.and Eichberg,C.G. : Effects on infant-mother attachment of mother's unresolved loss of an attachment figure or other traumatic experience.Routledge,New York,1991.
- 5) Capsi,A.and Silva,P.A. : Temperamental qualities at age three predict personality trait in young adulthood.Child Development.1995,66,486-498.